

国境なき教師団

●カンボジアの
教育支援に
関わって②



カンボジアの 小・中学校教員 養成の現状と 現任教師のレベル

金森 正臣 ●愛知教育大学名誉教授

CIESFカンボジアオフィス副代表



●小学校教員養成校
の授業風景
<撮影>CIESF松倉

カンボジアの教員養成のシステムは、日本とはやや異なります。小・中学校教員は、高等学校を卒業してからPTTC/RPTTC（小・中学校教員養成所）に入學し、二年間の修業年限で、それぞれの教員免許を取得します。日本の短期大学に相当します。小学校は全科、中学校は数学や理科に分かれているのは、日本と同じです。

小学校教員養成校PTTCは、十八校あり、二〇〇九年度の全体の入学定員は、二、二〇〇人でした。年によって入学定員が変わることが多く、正確な数はつかめません。計画養成ではなく、なぜ定員が変わるのかは不明です。ちなみに、二〇〇四年の統計では、小学校教員は、

い人も多いので、地方の六行政区は特別扱いで（定員二六〇人）、中学校を卒業した者がPTTCに入學できませんが、その行政区でしか教職につけません。

中学校教員養成校RPTTCは、六校あり、入学定員はおよそ一、二〇〇人です。こちらも毎年変わるのですが、卒業生の数を正確に知ることは難しい現状です。また、小学校教員もそうですが、一度学校に勤めても、途中で転職してしまう先生も少なくありません。従って、現在の状況で教員養成を行っても、まだまだ十年以上は教員不足は続くことと思われます。抜本的改革は、望み薄です。中学校教員養成校には、十五教科があり、理数科五教科を見ても、数学物理クラス、物理化学クラス、生物地学クラスなど複数の教科で募集されているために、募集のクラス数は、はっきりしません。この教科の組み合わせも頻繁に、変わります。まだ試行錯誤中といったところでは、最後の市街戦が終わったのが、一九九六年です。

その後二党による複雑な妥協政権がしばらく続き、政権が安定して十年ぐらいです。従って、色々な問題が整理されるのには、しばらく時間がかかりそうです。現在の教員養成は、短大卒を基準としています。ポル

四九、六〇三人です。小学生は、二、七四七、〇八〇人です。授業は普通、午前と午後で生徒が入れ替わる二部制です。教員の給料は安く、生活必要経費の三分の一くらいしか支給されていません。これは、カンボジアでは国内法の整備がまだ不十分で、税収が十分にならないために、政府が支払えないからです。不足分を先生たちはアルバイトでしのがなければなりません。都会ですと、プライベートタイムの朝や放課後に私塾を開くことやいろいろなアルバイトができます。地方に行くと、ほとんど副収入が得られませんから、畑を耕して食材の足しにしたりしています。このために、短大を出てまで地方に行かな

ポト政権が崩壊して、学校の再開が行われた一九八〇年ごろには、字の書ける人を探し出して、先生になってもらったそうです。また、十年前までは、便宜的に三〜六ヶ月間の短期間講習で教員養成を行っていました。このような事情から、現在でも小学校を卒業していない先生が少数ながら在職しています。

ところで、私は戦後すぐの昭和二十二年に小学校へ入学しました。山村の小さな小・中学校で、九クラス、十六人ほどの先生がいましたが、正規の先生は三人だけで、あとは代用教員の先生でした。中には高等学校を出たばかりの先生もいましたが、日本の学校教育は、基礎がしっかりしており、小・中学校の教科書の内容を理解できない先生はいなかったように思います。カンボジアでは、フランスの統治時代から、庶民の教育はあまり考えられておらず、寺子屋などに任ざられていました。特に理数科に関しては、レベルが低かったように思われます。中学校の理数科の内容を、理解できない先生が多くいるのが現状です。六万人以上いる小・中学校の先生のレベルを、今すぐ上げることは不可能です。我々は、教員養成所の先生のレベルアップをすることにしました。